

グラスフェッドのすすめ

(有)シェパード 獣医師 松本大策

3: グラスフェッドのいろいろ

さて、概論はこれくらいにしてそろそろグラスフェッドの手法というか「やり方」についてのお話をしておきましょう。こちら、いろいろなやり方がありますから、とりあえず羅列した上で、「自分ならどのやり方で行く」という方向性を、漠然とでよいので考えながら、そのあとの各論を読んでいただく方が効率的かと思います。

一口にグラスフェッドといっても、すでに取り組んでいる事例では、いろいろな方がいろいろなポリシーとやり方をなさっています。まず、最近注目を浴びているのが代謝すり込み(メタボリック・インプリンティング)という牛さんの体の仕組みを利用して高品質のグラスフェッド牛を育てようという試みです。こちらは九州大学の後藤先生を中心に研究が進んでいます。次に脚光を浴びているのは岩手の短角牛を用いたグラス(粗飼料)主体の「プレミアム短角牛」、それから放牧主体のやり方もありますし、もしも放牧地が少ない様でしたら、粗飼料畑で粗飼料を育てて、牛さんは舎飼いする方法もあります。広い土地のない場合は、いくつかの牧野や里山を巡回放牧しながらの方法もあります。少し趣は異なりますが、里山利用の放牧などは、林業の除草刈りかねた「林業の一環」もしくは「環境改善の一環」として「あるいは教育の一環としての「里山の保護」という目的をかねることもできます。ただし、この場合はあくまでも「畜産がメイン」という経営は難しい事も考えておかなければなりません。先にもお話ししましたが、放牧のためにはかなりの土地面積が必要ですから、「里山」や植林地などの広さでは多頭化は難しいのです。

オーストラリアやニュージーランドのグラスフェッドは、土地の広さの違いなどの問題で、日本でそのまま取り入れるにはいろいろと難しいと思います。完全なグラスフェッドというわけではありませんが、お隣の中国の肥育も土地の少ない日本ではグラスフェッドの参考になると思います。

という具合に、グラスフェッドは様々なやり方がありますし、逆に言うとこれからもっともっと可能性が広がるとも言えると思います。

それでは各論に入っていきます。

1, 放牧によるグラスフェッド

自然な形でのグラスフェッドというと、やはりみなさん真っ先に「放牧」を思い浮かべることと思います。まずはここから考えていきましょう。放牧といっても、ただ野に放せばよ



いというわけではありませんからね。また、単に「放牧型」と言っても周年放牧ができる土地なのか、冬場は舎飼いに戻してあげなくてはならないのか、なども考えておかなければなりません。冬場に雪が積もる地域では、冬場はどうしても放牧では飼料が足りないので舎飼いに戻して飼料給与をしてあげなくてはならないのです。

どこまでをグラスフェッドと呼ぶかはこれからの定義付けだと思いますが、僕のこのお話の中では、国産の飼料の利用率を高めることや、荒廃した農地の回復なども含めてグラスフェッドというのは大きな可能性を秘めているということで、あまり堅苦しい提議はしたくありません。「粗飼料主体を念頭に置いた飼養管理」であれば、グラスフェッドと呼ぶことにします。

さて、放牧型のグラスフェッドにおいて、最初に知っておかなければならないのは、どの程度の草地が必要か？ということです。これは二つの面から考えなければなりません。あまり考えない方から行きましょうか。まず1つは、「環境を汚染しない放牧密度」から考えるということです。「とりあえず、うちには5町歩の山があるから20頭ばっかし放して、エサが足りないときは購入のエサを与えればいいさ」なんて安易に考えては行けません。放牧するということは、牛さんの糞や尿で土地を汚染する、とも言えるのです。もちろん、適正な規模で放牧すれば、糞尿だって大切な肥料になります。でもその限界を超えてしまうと、土地を糞尿に含まれる窒素で汚染することになるのです。短いスパンで考えても、牛さんの食べる草が硝酸塩汚染されて、硝酸体中毒になるおそれがありますし、長いスパンで考えると土地も地下水も硝酸塩で汚染され、麓の農業にも被害を及ぼすかも知れません。

1haあたりに放牧出来る頭数の上限は、ホルスタインで1.7頭といわれています。ですから和牛でもこれにならって、過剰な放牧頭数になっていないかを注意しなければなりません。購入飼料を併用する場合には、つつい過剰になりやすいものなのです。「環境に優しい」をキャッチフレーズにするのであれば、このような事に十分配慮しなければなりません。こうした「売りの重要な部分」でウソがあると一気に信頼性が低下してしまいます。そうでなくとも最近食をまつわる偽装事件で消費者が敏感にな



写真: 斉藤牧場

っていますからね。あーあ、「船場吉兆の鮎の2度焼き」食べてみたかったなあ。あれもウソがあったから、お店を閉めなくちゃ行けなくなったのです。別の安い系列店でも出して「残り物だから安いでっせ」っていえば(もちろん衛生上の問題はクリアしなきゃいけません)エコな店として評価されたのかも知れないの



にね。

さて、次は牛さんの大切な飼料面から考えてみましょう。放牧体型ではいったい1haで何頭分の牛さんをまかなえるだけの草が生えるのでしょうか？通常は、牛さん1頭1haといえます。放牧地には、あまり背の高い草は向いていませんから、広い面積の割には養える牛さんの頭数は少なくなってしまうのです。放牧地を新規に作るのは結構大変です。北海道の旭川に「斉藤牧場」という

写真：斉藤旭さん



すてきな牧場があります。「牛が作る牧場」とか「山からミルクが流れてくる」などのキャッチフレーズで有名な、大変景観もよい放牧主体の牧場です(ただし酪農です)。この牧場のことを詳しく知りたい方は「命の輝き知ってるかい」という本を読んでみられたらよいと思います。この斉藤牧場は、前述したようにすばらしい放牧場があります。しかし、このすばらしい放牧場を作るのには斉藤旭さんの血のにじむような努力と長い年月、そしてすばらしい洞察力が費やされているのです。斎藤さんは開拓団で入植され、焼き畑式に開墾したそうですが、何度か山火事になって消防署に逮捕されたことがある(みなさん、あまり関係のないことですが「署」と付くお役所には刑事捜査官がいていずれも逮捕権を持っています。警察署だけでなく消防署、税務署、営林署などもそうなんですよ。トリビアですね)そうです。なんと自分の車まで燃しちゃったという強者です。

みなさんが新しく放牧に取り組むのであれば、放棄された放牧地や耕作放棄地が棄てるほど(なんと30万ヘクタール以上だそうです!)ありますから、最寄りの役場の農政課などに相談するのが早いでしょう。最低限の伐採は必要ですが、せっかく生えている木を新しくたくさん切ってしまうのは「自然に優しい」を標榜するならふさわしいことではありません。それから、放牧地は多めに用意しておきましょう。牛さんが集まる場



所は意外と決まってきて、糞などで放牧地が硝酸汚染すると、そこから生えた草はしばらく牛さんが食べません。その草が土壌に還元された後ようやく再び牛さんが食べる草が生えてくるので、すべての放牧地を有効に活用しようとしても無理が生じます。放牧地が、かならず余分な力を残せるようにしておかなくては余裕のある経営は

写真：燃えた車



出来ないでしょう。あと、放牧用だけでなく「採草地」の分も考えておきましょう。放牧だけで、もし牛さんのエサがまかなえないとき採草地からの飼料に頼るしかありません。

放牧地として適しているのは、日当たりがよく適度な日影がある場所です。また水はけがよい事も重要です。日当たりが悪いと粗飼料の発育がよくありませんし、日影となる林などがあれば雨の日や夏場の暑い日でも安心です。また、水はけが悪いとぬかるみやすく、牛の事故の原因となるだけでなく、ギシギシなどのイヤな雑草が生えやすいという欠点もあります。

放牧地とはいえ、牛さんの水飲み場は必要です。前述の斉藤牧場では、山水を引いて動かなくなった軽トラックの荷台にブルーシートを敷いて作った簡易水槽に溜めて使っています。初期投資は少ない方がよいですからね。しかし、最低限「牛さんが水をきちんと飲む」という事が条件です。牛さんは1日に30リットル以上も水を飲みますから、これが確保出来ないような場所は放牧地として不向きです。山水の場合は、水源に動物や鳥の死骸とか糞が入っていないかなど巡回して確認しなければなりません。通常、放牧牛は抵抗力が強く、泥水や自分の糞便の混ざった水でも飲むことがあります。しかし、とくに死んだ動物の場合、サルモネラ菌やクロストリジウム菌のような強毒性のものを持っている場合が多く(それで死んだわけですから)、飲み水をこれらの強毒菌が汚染した場合の被害はとて大きくなる可能性が高いのです。

万が一動物の死骸や糞便を水源で見つけた場合は、すぐに死体を除去するのはもちろん、水源の水をくみ出してピルコンSなどの消毒薬で一度水源を消毒する、牛さんの飼料にウルカルやゼオライトなどの吸着剤、アースジェネターなどの生菌剤を添加して、病気を防ぐ必要があります。もちろん牛さんの観察は十分に行って、少しでもおかしいと感じたらエクテシン液などの、原虫と細菌をいっぺんにたたけるような薬剤を投与するか獣医さんに見てもらうようにしましょう。「グラスフェッドの牛は健康だ」などと思いき、初期症状を見落としてしまうと思わぬしっぺ返しが来ますからね。

放牧型グラスフェッドの場合、放牧地(というか、イコール草地)の傾斜も考えなければなりません。歩くだけでしたら、牛さんはかなりの急傾斜地でも問題なく歩くことが出



写真:解りにくいけど牛道

来ます。また、繁殖母牛の場合でしたら、足腰が強くなり、また過肥を防ぐ、という意味でも傾斜地での放牧はさほど問題にしなくても良いでしょう。急斜面でも牛さんは、斜めに横切るように「牛道」を作って、そこを歩くようになります。だいたい傾斜が22度を超えると牛道を作り始め、傾斜が大きくなると牛道が格子状に



入り組んでくると言われます。牛道はおおよそ14度の傾斜角で作るそうです。牛さんはそうやって歩く道の傾斜を自分で調整していく知恵を持っています。



写真:土佐

しかし、これが「肥育」となると、傾斜が大きくなる事による運動エネルギーのロス、つまりカロリーの消耗も考えなくてははいけません。以前、ほぼグラスフィードイングによって飼育される土佐

龍馬空港のお隣にある牧場の牛さんや島根県の三瓶にある川村牧場以前、放牧型の繁殖経営で表彰も受けている優秀な農場です)において、母牛・仔牛ともに良好な増体をし、特に子牛はしっかりと前肩もでき、背中も平らになっているのを見て驚いたことがあります。しかし、この2つの牧場に共通することは、非常になだらかな放牧地(とくに土佐龍馬空港隣接の牧場は平地)であったということです。もしも急傾斜地であれば、もう少し増体は落ちて(筋肉質ではあったと思いますが)いたと考えられるのです。

では、肥育を目的として放牧型のグラスフェッドを行う場合、どの程度の傾斜までが適当なのでしょう？学術的には、5～15度とされていますが、実際の話、個体差や系統などによる差、自生もしくは耕作できる粗飼料の違いなど、まだまだ検証しなければならぬことがたくさんあるのです。また、狭い我が国で傾斜が一様な土地の入手も難しいでしょうし、最大傾斜角と言っても、そのキツイ傾斜地がせまく、他はなだらかであれば問題ないでしょうから、この「傾斜地」の問題は、およその角度として「15度程度



写真:川村牧場

でこんな感じか」と頭に入れておいて、牧場主が見て、あるいは自分で歩いてみて、「問題ないだろう」くらいの感覚でよいと思います。なんかいい加減に聞こえるかもしれませんが、運動量と消費エネルギーには個体差もありますし、環境温度などの影響も受けません。生き物というのは機械みたいに「正確にこの角度」なんて決められないのです。

